

東日本大震災復興支援事業東北応援ツアーに参加して

1983年経営学部卒 田和 善博

2011年3月11日、私はマレーシアの日本人学校で勤めていました。その日は、日本人学校も卒業式。一緒にマレーシアに行っていた中3の娘の卒業式でもありました。式を終え、昼食をとり、職員室で日本のYahooのページを見ていると、大きな地震が起こったとの速報。東北だということで、福島出身の先生にすぐ伝え、入ってくる情報を見ていましたが、こんな大きな被害が起こるとは夢にも思っていませんでした。

娘は中3で奈良県の公立高校を受験することになっていました。この年の入学試験日は3月14日の月曜日。娘はこの日の深夜にシンガポールを出発する便で関空に向かう予定でした。仮眠のため空港内のホテルで衛星チャンネルを見ていると、次々と津波に襲われる日本の映像が流れました。「いったい日本はどうなってしまうのだろう」というのがその時私が感じたことです。搭乗手続きに向かう私たちに、「日本に帰るのか？成田はクローズだよ。」と声をかけてもらいました。「関西は？」と聞くと、「関西は今のところクローズではない。」ということで、無事娘は日本に戻り、試験を受け、日本の高校生になりました。

その日からマレーシアの人は、私が日本人だと分かると必ず「日本は大丈夫か？あなたの家族は大丈夫か？」と声をかけてくれました。また、日本人会が行った義援金募集にも多くのマレーシアの人がたくさんのお金を寄付するだけでなく、色々心配してくれました。本当に人の温かさを感じ、世界中が平和であることの大切さを心に刻みました。それと共に、直接何もすることができない事が、もどかしく感じました。

年度が変わり、元同僚が多賀城市に派遣され、色々な活動をして奈良に戻ったという話を聞きました。彼に多賀城での活動の様子を紹介するプレゼンを送ってもらい、日本人学校の中学生にそれをもとにネットの情報も加え、小学生に東日本大震災について報告させる取組をしたりしました。

3年間のマレーシア勤務が終わり、東北に行きたいという願いを持ちながら帰国したものの、日々の生活に追われると共に、どこに行き何をしたらよいかわからない状態でなかなか行動を起こすことができませんでした。

そこに、今回の応援ツアーの案内が送られてきたのです。仕事の関係で、参加できない可能性もあったのですが、とりあえず応募だけでもしてみようと思し込んだところ、この週しかないというタイミングで、宮城県へ行かせていただく事ができました。

大規模に町全体を作り変えようとされている女川の様子、石巻の最新の魚市場など、復興に向かって確実に動いていると感じるところもあれば、全く手つかずで、街が流された後瓦礫を片づけただけのところも多くあるように思えました。

佐々木様ご夫妻のお話を聞かせていただき、閑上の日和山に立ったとき、本当に「街が無くなる」って事がどんなことか、その恐ろしさや絶望感はどのようなものであったか、何十分の一かもしれませんが理解できたような気がしました。そして、佐々木様ご夫妻をはじめ、被災された方々が、前を向いてしっかりと進んでおられることに感銘を受けた2日間でした。

「とにかく現地に来てもらい、見聞きした事を多くの人に伝えてほしい。」と言っていただきました。職業柄、多くの人に伝える機会には恵まれています。色々な機会に、見させていただき、感じさせていただいたことを伝えていきたいと思います。

ツアーから戻った週末、釜石の防災教育にかかわられた、群馬大学の片田先生のお話を聞く機会がありました。子ども達に命を守る行動をさせるための最も大きな障害は、長い経験からだんだん地震が来ても避難しなくなってしまった町の大人達の意識を変える事だったそうです。「本気で、語り継ぐ事」の難しさは、閑上の石碑のお話でもよくわかりました。

奈良の地で、子ども達に何を伝えなければならないのか。また、私自身避難所となる施設で勤務していることもあり、災害に備えどんな準備をしなければいけないのか。そして何より被災地の事を忘れず、どんな活動をすべきなのかを改めて考える機会となりました。

最後になりましたが、このような機会を与えていただき、企画・運営等大変お世話になった宮城県校友会の皆様、復興支援特別委員の皆様、校友会事務局の皆様はじめ関係の方々から感謝申し上げます。